

8月3日（月）サムエル記第二24章5～9節

「ヨアブは兵の登録人数を王に報告した。イスラエルには剣を使う兵士が八十万人おり、ユダの兵士は五十万人であった。」（9節）

ヨアブと軍の高官たちは、イスラエルの民を登録するために王の前から出て行きました。そして5節からは、彼らがたどったルートが示されています。彼らは、まずヨルダン川を渡り、アルノン川からモアブとの南の国境をなしているヨルダン川東方から登録を始めました。そしてヤゼルは、アンモンとの国境を接する町と見られています。6節で彼らはヨルダン川東側の北に移動し、ギルアデノの地を通りました。その後のダン・ヤアンのヤアンがよく分からないのですが、いずれにしてもダンに向かったことは間違いありませんし、ダビデも2節で「ダンからベエル・シェバに至るまでのイスラエルの全部族の間を行き巡り」とありますので、それに従ったと考えられます。そこから方向転換してシドンに回り、ツロの要塞へ行き、ユダのネゲブへ出て行き、ベエル・シェバに至りました。このようにして彼らは全土を行き巡り、九か月と二十日の後にエルサレムに帰りました。

ヨアブは兵の登録人数とイスラエルには剣を使う兵士が八十万人とユダの兵士は五十万人と報告しました。そして多くの学者が、この報告された数字に関して、北イスラエル部族の総数とユダの一部族の数にしては非現実的であると疑問を投げかけます。例えば、数詞の1000を意味するヘブル語が、旅団のような兵の集まりの単位だと解釈する人もありますが、実際にはよく分かりません。しかし、いずれにしても決して少なくない数であることは間違いありません。このようにして主はイスラエルの民の数を豊かに増し加えてくださり、そこにも主の豊かな恵みがあつたことをおぼえます。1節に「再び主の怒りがイスラエルに対して燃え上がり」とありますが、何度主はイスラエルに対して怒りを燃やされたことでしょうか。それでも主はご自分の民に対するあわれみと真実を決して忘れず、豊かに祝福してくださるお方なのです。

8月4日（火）サムエル記第二24章10節

「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。主よ、今、このしもべの咎を取り去ってください。私は本当に愚かなことをしました。」（10節）

「ダビデは、民を数えた後で、良心のとがめを感じた」とあり、その後にも「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。」とありますが、ダビデが感じた良心のとがめにしても、彼が罪として告白しているものが一体何なのかは、よく分かりません。普通に考えれば、ヨア

ブと軍の高官たちを遣わして人口調査をしたことではないかと思いますが、それほど単純なことではないようです。その中で、津村俊夫師はご自分のサムエル記第二の注解書の中で、出エジプト記30章12節の可能性にふれています。つまり、ダビデが良心のとがめを感じ、彼が罪だと思ったのは、たましいの償い金を主に納めていなかったということです。

いずれにしても、良心のとがめを感じたダビデは「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました」と自らの罪を素直に認め、自分の罪を主の前に告白しています。私たちも良心のとがめを感じることがあるかもしれませんが、それは聖霊が私たちに知らせてくださることであって、かたちを変えた恵みであることを私たちはおぼえましょう。そして「主よ、今、このしもべの咎を取り去ってください。」と咎を取り去ってくださることを謙遜に願っています。私たちも、罪を犯したことに気づかされたなら、決してそのままにせず、主の御前に出て、罪の赦しを願いたいと思わされます。私たちに真実な悔い改めが見られたなら、主はご自分の真実にかけて、私たちの罪を必ず赦してくださいます。

8月5日（水）サムエル記第二24章11～14節

「それは私には非常に辛いことです。主の手に陥らせてください。主のあわれみは深いからです。私が人の手には陥らないようにしてください。」（14節）

預言者ガドは、ダビデがサウルから追放者扱いされていた時に、適切な助言を与えた人物でした。（サムエル記第一22章5節）そのガドに主のことばがあったので、ガドはダビデのもとへ行き、主のことばとして「七年間の飢饉が、あなたの国に来るのがよいか。三か月間、あなたが敵の前を逃げ、敵があなたを追うのがよいか。三日間、あなたの国に疫病があるのがよいか。今、よく考えて、私を遣わされた方に（＝主）何と答えたらよいかを決めなさい。」と告げます。ダビデを無条件で赦すのではなく、そこにはわざわいも伴うということです。それに答えてダビデは、「それは私には非常に辛いことです。主の手に陥らせてください。主のあわれみは深いからです。私が人の手には陥らないようにしてください。」（14節）と言います。苦難は、短ければ短いほどいいに決まっていますが、期間が短いほど、さばきも重くなっていきます。決めきれないダビデは「それは私には非常に辛いことです。主の手に陥らせてください。主のあわれみは深いからです。私が人の手には陥らないようにしてください。」と答えました。つまり、あわれみ深い主に決めていただくということです。結局、あてにならない人の手には陥られないようにしていただいて、すべてを主の御手にゆだねるということです。

私たちも何かを決めなければならない場面に遭遇することがあるでしょう。その時に私たち

は人に頼りますか、主に頼りますか。主に頼るのであれば、なぜ主に頼るのでしょうか。どうか私たちも主のあわれみ深さを知らせていただき、主の御手にすべてをゆだねる信仰者でありたいと思わされます。

8月6日（木）サムエル記第二24章15～19節

「御使いは、エルサレムを滅ぼそうと手を伸ばした。主はわざわいを下すことを思い直し、民を滅ぼす御使いに言われた。「もう十分だ。手を引け。」主の使いは、エブス人アラウナの打ち場の傍らにいた。」（16節）

ダビデは決めかねていましたが、結局主はイスラエルに疫病を下されました。結果として全体で民のうちの七万人が死にました。これらの人々は、主のダビデの罪に対する怒りを鎮めるために犠牲となった人たちと言えます。私たちは、主はなぜそこまでするのかと思うのかもしれませんが、ダビデがどれほど大きな罪を犯したというのかと思うかもしれません。しかし、私たちの罪をその身に負い、キリストは十字架の上で苦しみ、血を流し、命を捨てられることで、神の私たちの罪に対する怒りはなだめられました。キリストの死は取るに足らない犠牲なのでしょうか。それは、あまりにも大きい犠牲であり、私たちはキリストの死をあまりにも小さく考えすぎているのではないかと思うことがあります。それほど神の罪に対する怒りは大きいことを私たちは認識すべきです。御使いが、エルサレムを滅ぼそうと手を伸ばしたとき、主はわざわいを下すことを思い直し、「もう十分だ。手を引け。」と言われました。ここに厳しいさばきの中に現れる主のあわれみを見ることができます。イスラエルの民は罪深い民ではありませんでしたが、決して滅ぼし尽されることはありませんでした。それは、ご自分の民に対する主のあわれみのゆえです。

17節で、ダビデはイスラエルの民を「羊の群れ」と呼んでいます。これは自分を羊飼いに例えているということなのでしょう。詩篇51篇18、19節に「どうかご恩寵により シオンにいつくしみを施し エルサレムの城壁を築き直してください。そのとき あなたは 義のいけにえを 焼き尽くされる全焼のささげ物を喜ばれます。そのとき 雄牛があなたの祭壇に献げられます。」とあります。1～17節でダビデは、自分の個人的な罪を悔い改めています、王であり、羊飼いである自分が犯した罪は必ず国家全体にその影響が及ぶことを深く認識していました。ですから、18節で「シオンにいつくしみを施し、エルサレムの城壁を築き直してください」との祈りがなされているのです。

18節で、預言者ガドは、「上って行って、エブス人アラウナの打ち場に、主のために祭壇を

築きなさい。」と言われました。これは、ダビデとイスラエルの民が神の怒りをなだめるためであったと思われます。まさにあわれみをもって主はダビデにそこで祭壇を築くように命じられたのです。そして、この後ソロモンが神殿を建てることとなり、そして私たちは主を礼拝するために毎週教会に来ています。それは罪深い者たちが主のあわれみにより招かれて主を礼拝しているのですが、やはり、そこで大切なことは「祭壇を築き直す」ということだろうと思われました。神の怒りをなだめるために、私たちが心からの悔い改めをもって主を礼拝するということです。私たちは、毎週どのような礼拝をささげているでしょうか。

8月7日（金）サムエル記第二24章20～25節

「ダビデは、そこに主のために祭壇を築き、全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げた。主が、この国のための祈りに心を動かされたので、イスラエルへの主の罰は終わった。」（25節）

19節には「主が命じられたとおりに上って行った」とあり、20節には「アラウナが見下ろすと」とありますように、打ち場はもみ殻を風で吹き飛ばすことができるように、高台に置かれていました。王と家来たちが自分の方へ向かって進んで来るのを見ると、アラウナは出て行き、地にひれ伏して王に礼をします。21節では、なぜしもべのところにおいでになったのですかと尋ねるアラウナに、ダビデはあなたの打ち場を買って、主のために祭壇を築きたいと言います。そのダビデに対して、アラウナは「お気に召す物を取って、お献げください。」と言います。これは代金を受け取らず、献納したいとの意思表示です。ですから23節でも「王よ、このアラウナはすべてを王に差し上げます。」と言います。しかし、ダビデは、アラウナの申し出を断り、「私は代金を払って、あなたから買いたい」と言います。（24節）罪の贖いのための祭壇ということを考えれば、そこに代価が払われることが必要であるとダビデが考えたということなのでしょう。ダビデが、主のために祭壇を築き、全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げると、イスラエルへの主の罰は終わりました。罪に対する神の怒りが完全になだめられたということです。

サムエル記は何の進展もなく、これで終わることになります。そして次の列王記第一においては、ダビデの晩年へと話しが移り、いきなり王位継承の争いが展開されます。そしてサムエル記の主要なテーマは、神が直接国を治める神政国家から王を立てて王が政治を行う君主制へと移行したことです。そして、ダビデ王朝の確立も主要テーマと言えます。

そして、サムエル記第二24章は、ダビデが祭壇を築くことによる神への礼拝と神との和解をもって終わっていますが、神の救いの計画は、救い主イエス・キリストの到来をもって完全

に成就します。神は、ダビデやイスラエルの民の罪に対して怒りを燃やされますが、私たちの罪に対しても変わらず怒りを燃やされるお方です。しかし、イエス様が私たちと神との間の仲介者となってくださり、イエスが十字架で流された血は、私たちの罪を完全に赦して、私たちが義とし、神の怒りを完全になだめるものなのです。

8月8日（土）ヘブル人への手紙1章1、2節

**「神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られましたが、」
（1節）**

サムエル記が終わりましたので、今日からヘブル人への手紙をとともに読んでまいりたいと思います。

ヘブル人への手紙は、背教の危険にさらされていた信徒たちに、信仰の創始者であり完成者であるイエスから目を離さず、成熟を目指して進むよう勧めています。イエスは、傷のないご自身をただ一度いけにえとしてささげることで、すべての罪を取り除かれました。それゆえに、クリスチャンとされた者たちは、賛美のいけにえをささげ、善を行い、人に分け与えるべきなのです。

ヘブル人への手紙を見ればすぐに気がつかれると思いますが、序言部分には、受け取り人や差出人、あいさつ文など、書簡として本来あるべきものがありません。むしろ、原文では1～4節までが一つの長い文になっていて、その中にイエスとは誰かという重要な神学的主題も含まれていて、イエスとの特別な関係に召された私たちに対する恵みも示されています。

ここで、まず私たちが教えられることは神様は人に語られる神様、つまり語ることによってご自身を啓示なさる神様ということです。そのようにして、神様は大きな愛と忍耐をもって罪人である私たち人間に関わろうとしてください。そして、ここで私たちの目を引くのが、「多くの方法で先祖たちに語られましたが」とありますように語る方法の多様性です。そして、「神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られました」とありますが、ここで言われている預言者というのは、旧約の預言者はもちろんですが、モーセ（申命記18：15参照）ダビデ（使徒の働き1：16「聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことば」）も含まれると考えられます。そして、預言者たちは、自分の時代の民に語りかけるように神によって召された人たちで、「一主のことば」「主は言われる」と語ることにより、彼らは主の権威をもって語りました。そして、旧約聖書を通して語られていたことは、救い主（メシヤ）の誕生の預言であり、その救い主を通してなされる罪からの完全な救いでした。そ

の預言の成就としてイエス・キリストがこの地上に来てくださったのです。

2節で「この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。」とありますが、まさにイエス・キリストこそ、究極の神からの語りかけであり、神からの啓示です。なぜなら、イエス・キリストは、神の御子であって、まさに神ご自身がまことの人となってこの地上に来てくださることにより、霊であるがゆえに目に見えない神が自らを目に見える人の姿をとって、ご自身を揭示してくださったからです。

神は多くの方法で先祖たちに語られることで、人に関わろうとしてくださったのですが、終わりの時に、創造者であるお方が被造物となってまで神は人類に関わろうとしてくださったのです。滅びゆく罪人を決してあきらめることなく、救いへ導こうとされた神の愛がそのような驚くべきことをされたのです。

8月9日（日）ヘブル人への手紙1章2節

「この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。」（2節）

この1節と2節を見ますと、いくつかの対比があることに私たちは気がつかれます。まず時を表す言葉として「昔」と「この終わりの時」、そして語る人物として「預言者たちによって」と「御子にあって」、啓示の受け手が「先祖たち」と「私たち」です。そして、最後の対比が、旧約時代には「多くの部分に分け、多くの方法で」語られたのが、「ある一定の時期に、御子イエス・キリストという一つの方法を通して」語られたのです。そして、イエス・キリストが、十字架で死なれましたが、三日目によみがえられ、天に帰られた後は、聖霊の働きを通してみことばによって主は語られるのです。ですから、そう考えますとキリストこそ人類に対する最後で究極の啓示であったことが分かりますし、御子を通して神は、人類に啓示しなければならぬことをすべて啓示し尽したとも言えるでしょう。そして、イエス・キリストを通して啓示されたことは、新約聖書の中にすべて記されてあります。ですから、これ以上私たちはそこに何かを付け加える必要はありませんし、私的解釈をほどこして何かを説明する必要は全くないのです。（ペテロの手紙第二1章20節参照）

2節の後半から、御子について記されてあります。「神は御子を万物の相続者と定め」とありますが、「御子によって世界を造られました。」とあるとおり、キリストは天地万物の創造に関わられた方として、父は御子の手に万物をゆだねられました。御子が世界の始まる前から存在し、万物の創造に深く関わったのは、「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。」（ヨハネの福音書1章3節）とのみこ

とばかりも明らかです。つまり、イエス・キリストは神であられるということです。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け。」(マタイの福音書17章5節)と
言われているとおりに、私たちは謙遜になってまことの神であり、まことの人であるキリスト
に聞かなければなりません。